

満州

満州に渡り・引き揚げるまで

山形県 結城 吉之助

昭和六年

大学在学中の九月、満州の関東軍と軍閥張学良軍が戦争しあつて、張軍が敗走したあとに満州国が誕生した。

昭和七年

五・一五事件が勃発し、話せばわかる、と言つたが撃たれた犬養首相の方が英雄的で、撃つた青年将校は無茶で非武士道であつたと思つた。

私は、夏休みに農村の実状視察に出かけた。

往きは徒歩、帰途は国鉄列車である。

七月二十四、二十五日 東京青山三丁目→埼玉県→

栃木県鬼怒川温泉

七月二十六、二十七日 鬼怒川温泉→福島県田島町

→楢沢村→高野村→昭和村

七月二十八日 昭和村→玉梨村→川口村

七月二十九日 川口村→西方村→沼沢村→柳津村

七月三十日 柳津村→郡山町→東京青山三丁目

以上、農村の実態の説明を聴き乍ら視察し、特に各個々の農家の収支、生活内容、教育、現在の希望、将来の希望など、とりまとめた。素朴で率直な地方の話題の裏、話題に内包されている真実に何かがある、それは何か。

人間生きてゆくために、法律にふれなければ何やつ

てもかまわない、というだけの考えでもない。

生きるためには道徳、良心に従って社会秩序を守らねばならない、というだけの考えでもない。

とにかく、東北の一隅たる農村の実態にふれて、そのまま放置すれば大きな社会問題が惹起するという予感を私は抱いた。

東洋より、西洋に学び、西洋においつき、おいこせで進んでいる日本は唯物万能社会が生んだ経済の利害のくらしが常識化している。何とかこの混濁逆巻く日本を正道にもどしたい。

しかし、正道にもどすには余りにも犠牲が大きい。

どこか新しい社会をつくる天地がないかと暗夜に光明を探し求めていた。

これが、当時の日本、とくに農村の青壮年の悲鳴に似たる真実の叫びであった。

この現実を深く見聞した私は一身を抛って清新な日本社会の改造に奔走するか、それとも日本の生命線と言っている満蒙大陸に現地人と協力しあつて理想社会の建設に当るか、大海に浮ぶ一粒の粟に似たる学生

の分際で青二才の私は真剣に考えをめぐらしていた。

昭和八年

折しも、満蒙開拓の指導者養成、満州鏡泊学園創設の記事が、あらゆる新聞に発表された。

私は、長いトンネルを潜り抜け、しばらくぶりで青空をながめたような感じをうけた。

少年時代から大陸志向だった私は、身元保証人の松岡俊三代議士にご相談申し上げたところ、大賛成され、これは賤別と言われ、三百円の入学金を出してくれた。当時の三百円は大金であった。

某日、学園創設者、山田悌一氏、柴田徳次郎館長の両氏と国士館で面談した。主として山田氏から学園の構想を聴取し、初対面で山田氏の思想と容貌に魅せられ、入学願いを申し上げたところ、早速口頭で入学の許可をうけた。

帰宅途中、洪谷の松涛町、頭山満翁を訪ね、満州鏡泊学園入りの決意を報告した。翁は喜悅満面して忠孝一本の軸物を授与してくれた。

その後、時を得て山形の故里に帰り、両親兄弟、友

人に渡満の決意を伝えたところ、皆喜んでくれた。

工藤伊惣治村長は小学校講堂に青年団と婦女会の方々を集め、私の渡満挨拶の講演会を開催してくれた。故里は有難きかなと、しみじみと感じた。

日本は八千万人の人口で、満ち溢れて失業者が増加の一途をたどっている。土地も山頂まで耕し、農家の二、三男はゆくところが無い。

アメリカは排日、ブラジルは遠すぎる。一衣帯水の海の向こうに満州がある。

私は以上のような簡単な理由で渡満するのではない。

故里の母校の忠魂碑にみられるように、日清、日露の大戦で十万人余の日本兵士の血が満州の大地に流されている。血で得た權益こそ、日本民族の生命線として守る義務がある。

また、張学良の軍閥政権は満州農民に対する圧政を強いていた。この圧政から救わねばならない。それは、満州に早くから先住している漢民族に対し、日本農民が参加して満州の未開発地域を開拓、開発へ発展

することは、新しい満州国の使命である。

さかのほれば、東三省、つまり満州は中国本土とは異なる民族の土地であり、中国古代史には、いわゆる塞外の異民族の地であった。

山海関から遠く長く築いた万里の長城は、それを如実に示している。

新しい国、満州は日本、漢民族、満州族、朝鮮族、蒙古族、の五族の民族協和して国威を顕現して自由な民主主義文化国家を築くことは、日本と満州だけでなく、世界各国に、これからの国家構造は斯くあるべきだ、との模範を顕示することが、われ自らの使命であると結論づけていた。

満州鏡泊学園

学園の創設者は山田悌一氏である。山田氏は九州都城、由緒ある勤皇家の山田家、東洋協会専門学校（のちの拓大）を卒業、蒙古独立運動を支援に川島芳子らと活躍した人、のち柴田徳次郎氏を助けて国士館創設に尽力された。

山田氏は、東亜百年の大計は、中国人と協力調和の

できる人材養成こそ、基本的急務であるとし、満州における壮大な私学の開校を目指した。

昭和七年、自ら調査して白羽の矢を立てたのが、山紫水明の鏡泊湖、湖畔である。

昭和八年一月、満州国文教部第一号で認可された。

四月には第一期生二百人が入学した。東京での教育は国士館高等拓殖学校に委託生として、全員高拓宿舍に起居し、校長は小泉六一陸軍中将、開校にあたり、徳富蘇峰翁は「男児四方の志」との一文を書かれて祝辞をのべる、駒井徳三満州国総務庁長官の講演などで感激した。

国士館高拓の委託学生教育四か月を終え、昭和八年八月一日、満州鏡泊学園二百人の学生は渡満の壮途に東京駅から立った。

焼けるような熱い日である。荒木貞夫陸軍大臣、永井柳太郎拓務大臣の訓示は全学生を鼓舞した。

神戸港からハルピン丸で大連に上陸、国都新京に着いて国務院で鄭孝胥総理大臣の風貌に接して挨拶をうけた。

八月十一日、敦化県域に到着、東部満州のこの地で自給生活の作業訓練をしながら越冬した。

昭和九年

この年の三月一日で満州国は満州帝国となり、大同から康徳に変わり、いたるところ祝賀された。

三月上旬から中旬にかけて敦化の宿舍から全員馬車隊で二泊三日かかって鏡泊湖の湖畔に辿りつき、農家を十戸ほど買収したあとに分屯した。

宿舍周囲の鉄条網張り、温床づくり、水田用地と水路の測量など昼は農耕、夜は警備、降雨の日は読書という生活に入った。

鏡泊湖一帯を外界から隔てている山脈は西に張広才嶺、南に哈尔巴嶺、東にも老爺嶺、北方だけが牡丹江の流れに沿うて東京城平野が開けている。

この山嶺は原始林で雉子、ノロ、虎、鹿、豹の生息地、木耳まみみ、にんじん、煙草、蜂蜜などとれる湖に珍重フジという鮎あしがとれる、正に桃源郷であり、また、反満抗日の匪賊の巢窟でもある。

四月某日、朝礼の場で、山田悌一総務から、結城、

水上七雄、松下俊雄の三人を第二期生指導員に任命した、東京の日本青年会館に待機している二期生を引率のため日本へ行くことになった。

現地の状況を気にしながら、三人は敦化、清津、敦賀を経て東京の青年会館に入った。

四十四人の二期生を引率して、再び神戸港から大連に上陸、学園の新京事務所に到着したのが五月十七日である。

そこで一通の電報を受けとった。「山田総務一行十五人、大廟嶺で戦死した」との凶報である。私にとって天地が覆り、全身の力が抜けてゆく感じである。

更に詳報によれば、寧安県に出張の帰途、山田総務の一行は大廟嶺で匪賊の待ち伏せを受けて、全員戦死を遂げたのである。一行は山田総務、今井和佐久幹事、樹下清指導員、任茂林通訳、学生の武田六蔵、菅原寅夫、亀沢貞雄、後藤宇三郎、室田隼夫の五人、守備隊の椎名伍長以下五人で合計十五人である。

大廟嶺の峠に差しかかる道路面に、落し穴をつくって、自動車の前車輪が落ちるのを待って、匪賊は両側

の稜線から一斉に狙撃したのである。

かくて、一行は大廟嶺の林の中の路上で、四十二歳の山田総務は若い学生とともに命を散らした。

この詳報をさくもの皆、恩師山田先生、同志の面々を思い胸中に去来する涙！悲風惨たるかな、大廟嶺

私ども三人は、只管ひたすらに二期生を無事学園まで引率の大役を果たすべく、二期生を励ましあい、新京滞在中、学園名誉総長、田辺熊七國務院参議を訪ねて挨拶をうけた二期生は責任の重要性を感じてくれたと思った。

六月五日 敦化から鏡泊湖に向かった。池田馬車隊と岩見伍長以下十一人の日本軍に護られて二期生四十人の行軍は、降りつづく雨の中にも夜営を繰り返かえし、ぬかるみに阻まれ、九日、午後ソーチオミという窪地で匪賊の待ち伏せ襲撃に遭い、きわめて少ない兵力にも拘らず岩見伍長以下日本兵は勇猛果敢に防戦し、衆寡敵し難い激戦中においても、学生等を戦闘に参加せしめず、只、岩見伍長から私ども三人の指導員に、学園本部へ通報に赴くことの依頼をうけた。

私は、水上、松下の両氏に二期生の行動を頼み、敵

の弾丸、弾雨の危険を冒し飛鳥の早技のごとく走った。死は止む得ない覚悟である。

学園の陸軍中佐、小池司令は匪賊襲撃の情報を得て、学園軍を率いて途中まで救援にきていたのと私は出遭った。「ソーチオミで激戦中」と伝え、小池司令を案内して激戦地にもどったが、匪賊を完全に撃退せしめ、四十四人の学生は全員無事であったことが何よりも感激した。

しかし、日本軍の力戦奮闘も遂に岩見伍長以下五勇士の戦死をみるに至ったのは忘れることのできない守護神である。

敦化出発以来十一日目の六月十五日、ようやく学園へ到着した。

二期生四十四人は渡満早々敦化を出発して以来匪賊の襲撃をうけること五回に及び、もつとも激烈をきわめたのはソーチオミの襲撃であり、学園の宿舎に到着したところ、千五百人の匪賊が学園を包囲しているさ中であつて惨憺たる環境である。二期生四十四人が夢にみた学園と、その現実とは恐ろしい隔たりがあるこ

とを感じたのである。しかもアミーバ赤痢にやられたものが続出した。

更に、また八月十六日に、陸軍少尉学園の上杉虎寿学監指揮の下に学生十人が物資輸送のため京城へ赴き、八月十九日、馬車隊を護衛して帰園の途次、午後二時頃大廟嶺の密林にさしかかった際、匪賊に狙撃され、学園軍は直ちに応戦して撃退したが、学生小野田正三氏は胸部に貫通銃創をうけ、学生同志に見守られつつ遂に死亡した。

ああ！大廟嶺！山田総務等一行十四人を、ここで失い、今また、この殉難である。魔の大廟嶺、匪賊に痛めつけられた、こうした事変、それは筆舌に尽きせぬ惨憺たるものであった。

私は、こうした不幸の度毎に、数珠を携えて浄土宗の正信掲と阿弥陀経を誦経し、在家の坊さんによつて懇ろに葬式を執り行つた。

学園でわれわれの食いものは包米、豆、それに僅かの米を混入したものが主食、蔬菜は欠乏したので野草を食ふこととした。この結果は消化不良を起しアミー

バ赤痢患者になり、全員の四分の三ほどが罹^{かか}つてしまつた。

只、困つたことに、はるばる日本から学園に來たばかりの二期生の多くが、アミーバ赤痢に罹^{かか}つてしまつた。六、七、八月の三か月の間に蔓延し、勿論作業はできない。部屋にござるござる転げこんで見ても哀れな有様である。血便がでる、唸る、叫ぶ、患者を看護してくれるものは、たつた一人の園医、田中宇七軍医中尉がいるのみ、しかも田中園医もアミーバ患者であつた。私は、幸いに頑健だつたから部屋中を駆けめぐつていたが、患者でホームシックにかかつている若者の魂をゆり動かして生きる希望を与えることの如何に至難であるか、をしみじみと感じた。

八月末、学園生の中から六十余人の徴兵検査のため、新京に赴かなければならなかつた。

しかし、絶海の孤島化した学園から新京に行けない。それは悪路のところを病体の学生の多いことと、途中匪賊の蠢^{しゅん}動はげしい時である。これらを理由に、猶予方無電で交渉した結果、関東軍から許可された。

その頃、匪賊は益々跳梁^{ちやうりやう}し出した。対岸の山には匪賊の群がる姿さえ見られた。

学園生は病める身体を、疲れた身体を望楼に、塹壕に立つて見張るのである。それも昼夜を分かたぬ張番である。それでも誰も不平を言うものがない。言つてはおれない。不平と言うものは余裕のあるときにでる愚痴であることを、この時ほど強く感じたことはない。

それに学園のわれわれを恩師の山田先生の御霊が護つていてくれる。われわれは恩師盟友の死を無意味にしてはならぬといった思いやりの心で、こうした緊張がつづいたのであるう。一人の脱落者もなく、不平も言わず、耕作と警備につとめた。このようにして昭和九年は苦難につぐ苦難のうちに終わった。

昭和十年

明けて新年早々から学園は資金難、食糧難で窮地に陥つてしまつた。

やがて春酺^{たけなわ}となるや、湖畔は無心に百花繚乱として咲きはこる。夕暮れに学生は鈴蘭、百合、ねじ、あ

やめなどを摘みとって御霊ヶ岡の恩師、盟友の墓詣でをするのである。

しかし、物資は欠乏に次ぐ欠乏である。相変わらず、包米、高粱、粟の混食、小麦粉は湯団子にして食べた。塩分のない食事はほんとうに困った。栄養不良の結果は、夜盲症が続出した。夜に外出はできない。石油が絶えてしまったので幾夜も燈のない夜をおくった。そうした夜は原始生活のように皿に豆油を燈した。

こうした生活に耐え忍んだ。世の悪罵と嘲笑に報いようと思ったものである。

私は、夜外に出て、「憂きことの、なおこの上につもれなし 限りある身の 力ためさん」「われに七難八苦を与え給へ」と若武者山中鹿之助の三日月に向かつて唱えた文句を、こよなく愛して朗詠し、自らを鼓舞した。私の側に影の如く付き添って協力してくれた合田義一君（北海道出身）も合詠していた。

この六月、徴兵検査の猶予は、これ以上できぬとあって、牡丹江兵事部目指して七十余人が行軍で出発。途中大廟嶺で恩師、盟友戦死の跡に花束をささげて手

向け、皆は長い黙禱がつづいた。

私は、この検査で甲種合格、陸軍歩兵第七四連隊に入営を命ぜられた。

苦難の学園は如何になるのか、解散か、定着かの岐路に達着した。

七月三日、大林一之総務が、はるばる東京から、この鏡泊湖に来られた。そして関東軍と折衝の結果、左記の如く学園生に示したのである。

一、大林総務は責任を負うて辞任、古幡景美幹事が現地代表として一切の処理に任ず。

二、学園の問題解決迄は関東軍が経営す。

三、応急の食糧費として、拓務省補助一万円を以って食費を繋ぐこと。

四、学園負債十万円は学園財産を処分し、近く実現する移民会社をして買取せしむ。

五、学生は希望により、拓務省第四次の基幹移民として入植せしめる。また一般移民の農事指導員とする。

大林一之総務は声涙ともに下る。訣別の辞をのべて、学園の運命を悲しんで帰京したのである。

私は入営のため、昭和十年十一月二十一日最初に最後の学園卒業式には出席できなかったが、とにかく、卒業式を終えて全学生は悲壮な決意を胸に四方に散じたのである。

大林総務の話を受けた学園生はそれぞれ己れの道を選ぶ集団が自然に形に現われた。

大勢は御霊ヶ岡の恩師、盟友の御霊をまもり、この地で原住民とともに、栄ある民族協和の理想郷をつくる、という決意のもの多く、つまり学園村づくりの哲学を唱える高椋幹樹君の意見に傾いていた。

私は、第四次拓務省移民団の基幹になる決意で、水上七雄、藤沢寅三の両君に相談し全員に呼びかけて希望者を募ったところ、六十余人いたが、段々減って四十四人になった。

関東軍に提出文書を水上七雄君に文案作りを頼み名簿を添えて、古幡幹事に提示したところ、これを早速、関東軍第三課の秋永参謀に、君達代表が持参して説明されたいとの古幡幹事の助言である。

私は、藤沢寅三君を連れて、鏡泊湖から新京の関東

軍を訪問した。

秋永参謀外、ほかの参謀からも懇切な説明をさき、我々の願意が達したのである。

新京滞在一週間は、興農部参事官井上義人氏（古賀新作指導員と九大同窓の方）に古賀指導員の紹介状持参したので、井上ご家族に大変お世話になったことは忘れられない。

右のことなど学園に帰って報告した。基幹移民の四十四人は一応安心し落ちついて、その準備にとりかかった。

しかし、私は徴兵にあい、後ろ髪を引かれる思いで学園を去って、一路帰国したのである。昭和十年十月某日二十五歳であった。

在満三年間、死一步手前の生活をくぐり抜けて、祖国の故里に帰った。国民の義務である徴兵として入営するためなのである。満州での惨憺たる苦勞した話など、歯を食いしばって、言葉のはしにも出さず、莞爾かんじとして故里の人々に再会の喜びだけをのべた、意地っ張りの帰郷であった。

思えば学園の生活は生涯で最も深い友情に結ばれた集団であった。

朝鮮、咸興歩兵第七四連隊に入営して一年有余の軍隊生活は、私の生涯によきにつけ、あしきにつけ不屈の意地つ張りを根強く芽生えさせたように思う。

昭和十一年

私が咸興の七四連隊に在营中、満州鏡泊学園出身の第四次移民団は、佐藤修団長のもと、藤沢寅三郷長で素晴らしい開拓村が理想的に育ち、全満で有名になっている情報を入手していた。

一時は、私がいなければまとまらないだろうなどと、うぬぼれも甚だしいことがわかり、団員の労苦に謝し、現在の陣容で進みたい。

私は一人で生きる道をさがし求めるとの手紙を幾度か水上、藤沢の両君と往復しあってその了解をとりつけた。

咸興連隊では益永三中隊長（のちの陸軍少将。大阪幼年学校長）と親交を結び、よき思い出をのこし除隊した。

また、在隊中に法政大学の先輩、宮嶋繁豊参事官に交渉し、満州国政府に入ったのは、六月某日、吉林省懷徳県街村指導官勤務を命ぜられた。

弟の常雄は、京都の小松均伯父宅で、農林学校で学び私の除隊を待機していた。私は電報で咸興に呼び寄せ一緒に兄弟で満州に渡ったのである。公主嶺のこじんまりした住宅で常雄と二人のたのしい生活は長くはなかった。

常雄は南満州鉄道に採用され吉林鐵路局勤務を命ぜられた。私も吉林省実業庁開拓部に転勤になった。

昭和十二年

吉林省内に日本から鐵路愛護移民団の入植世話幹旋役にと開拓部勤務を命ぜられた。開拓行政は拓地の用地買収が円滑にいけば万点であった。私は拓地買収については土地所有者の現地満州人の立場に立つて完全了解なければ、断じて売買に応じないことを堅持し続けたものである。

昭和十三年

政府は街村法を施行するに伴い、私は伊通県地方課

長を命ぜられ、ここでは地味な村づくりをいたし、伊通県内の街村長全員とともに訪日行政視察団を組織してまわった。途中東京で元首相の平沼騏一郎枢密院議長の招宴をうけ、日満一体の親善友好を果たした。

この年に、満州国政府は正規採用でなく、その都度、推薦で採用した私のような立場のものが全満に相当の人数がいたらしく、こうしたものを、三か月の短期間教育することとなった。場所は大同学院中央訓練所で、全満から召集をうけて特訓をうけた。この特訓を、私はいり切つて行動したのが気に入られたものか、大同学院の戸倉勝人学監が野村登亀江中将に代つて、是非中央訓練所の教官にと所望されたが、一応お断りした。その後わざわざ伊通県庁までお出でになつてのお願いをうけたが諾するわけにいかない、断つて辛い思いをしたことがある。

昭和十五年

電源開発から耕地田畑の埋没に伴う農民の反対にあり、吉林省の松花江ダム建設で樺甸県を中心とした地方に匪賊化した治安工作を警務庁と密接な連繫をとる

ようにと、私に樺甸県総務部長へと要請があり、任命された。

幸いに県協和会の日暮台雄（旭川出身）事務長の協力を得て大事に至らず、樺甸県には翌年の十六年まで勤めた。

昭和十七年

この年、政府は協和会と人事交流が行われ、郷土の先輩、松木俠総務庁次長の勧めもあつて、私は協和会に出向することとなった。

ソ満国境で、炭鉱の宝庫である雞寧県本部事務長として赴任した。

この雞寧県は、昭和十年、満州鏡泊学園の解散にあり、関東軍に交渉し学園の盟友四十四人とともに、雞寧県城子河第四次移民団に入植することを許可された地、現に盟友はこの地に居住している。そこに赴任した奇縁に正に感慨無量であった。

協和会の詳述は省略するが、協和会は全満州国の国民運動の組織である満州建国の国の礎は、日、満、漢、蒙、朝の五族協和の上に王道築土建設を意図したので

あるから、政府は官僚化に流れず、国民は五族調和のとれる社会秩序を保つていくために、意図的に政府と協和会の人事交流をなしていた。

私は、前記に述べたごとく、もとより民心の安定強化を図つて、社会生活の防衛とする考えをもつて基本としてきたことが、満州国民としての立場は、五族の協和こそ満州国の安定と国民生活の防衛である。従つて、満州国が意図する協和会運動は建国の理想である。

雞寧県では、戦局の推移に従い、物資労力の収奪を強行せざるを得ない要請にあつて、久保田豊県長（のちの代議士）は、全街村長に対し、粟、高粱、大豆の供出命令を出していたが、これに応じないのは、陳子君（謝文東と頭目兄弟の仲）哈達崗村長だけ、私は丸腰で、陳子君村長宅に宿泊しながら、供出に協力方ねがい、これが達成した。

戦局の逼迫に応じて、人材総動員を有効にすることであるが、有為の人材は根こそぎ応召していく。満州人は、もう既に動かなくなつていた。

昭和二十年八月六日広島、九日長崎に原爆投下、ソ

連は日ソ中立条約を破つて、八月八日雞寧県に侵攻、戦場化した。

久保田県長は緊急官民合同会議を召集協議し、男子は軍と行動をとにもする。女、子供、老人は全員、牡丹江方面に避難させると決めた。家族は夫婦別ればなれとなる悲痛の極限である。

私は雞寧駅で駅長に協力し、牡丹江方面の輸送に指揮をとつていた。

駅の構外広場に荷物をかかえて集まる群衆、何人もの幼児を背負い、手を引いて号泣しながら列車に乗ろうとする婦人、子供、泣き叫んでいる様子は、この世とは思われぬ地獄である。義理も人情もなく、只、自分だけ生きたい、助かりたい、の行動をみるにしのびなかつた。

まつくら闇の夜に、ソ連軍機から照明弾が飛んできたので、その恐ろしさに、ワーワー泣き叫ぶ声が一瞬に消えるがごとく泣き止んだりした。

照明弾で昼のように明るくなった駅構外の広場にいる群衆めがけて、ソ連機から機銃掃射されたので、こ

れにはたまらない。逃げるひまもなく何十人か死亡した惨憺たる悲劇である。

その頃、妻は、紀昭を背負い、仁子の手を引いて、ようやく列車に乗り移って牡丹江むけ出発するのを見とどけた。しかし、発車したばかりの列車めがけて、ソ連機の射撃するのを見た私は、家族とこれが今生の別れになると思った。

仁王のような顔をして私は、気狂いのようになって、奥地から雞寧駅めがけて避難してくる群衆に大声を張りあげて整理の指揮をとっていた。

八月十一日

牡丹江兵事部長名の電話で、雞寧県にいる日本の男子全員、牡丹江に召集せよと命令が届いた。

その夜、無蓋車に乗って牡丹江行である。

出発直前、ソ連機の来襲で機銃掃射、幾人か、ばたばた倒れた。悲しいかな死人をだした。その死体を放棄したまま、無蓋車は動いてしまった。車上から合掌するのみ、夜行である。林口手前だった。意地悪くも、またもソ連機来襲して無差別機銃掃射で列車の中で幾

人か倒れて血が流れる。抱いている幼児の頭が転げ落ちたのを拾って、気が狂って号泣する母親の姿、機銃掃射で幼児の首が撃たれたのである。

列車が駅に暫時停車しているところに、朝鮮人が先頭に満州人も無蓋車めざして、日本人の持ち物を搔っ払いに集団で来襲する。これに抵抗すれば、大きく反発することを恐れ、歯を食いしばって、なけなしの物や金を放り投げて耐え忍んだ。

八月十二日

牡丹江に着いた途端、ソ連機来襲である。駅から司令部に行く途中の街路でソ連の爆弾投下に遭う。

私は、咄嗟に電柱の陰を頭に、平蜘蛛に伏せた。顔をあげて見たが、私の傍に立っていた幾人かは影も形も、あとかたもなかった。

人間の運と不運、人生の明暗を、この時ほど強烈に感じたことはない。

司令部の兵事係りを訪ねたところ、少佐の肩章をつけた将校から、牡丹江駅駐屯地司令部連絡所において民心工作員として勤めるようにとの命令であった。な

お、東安省からきた家族は東満総省長官舎にいて、つけ加えてくれた。

早速、総省長官舎を訪ねた。軍、官、民の家族の中にいた妻は二人の子供と一緒に走り寄ってきて喜び泣いた。

最早や、日本の敗色歴然たる判断である。家族ともに生死を共に行動をする考えに流れがちだったが、公人に立ちかえると、それはできなかった。

私は無限の愛情をこめて妻の労苦をいたわり、仁子（四歳）と紀昭（一歳）をいませ励ました。

ところが、仁子は私の腕を力をこめて抱きしめ、「お父さん帰ったら駄目、一緒にいて下さい。一緒にいて下さい。お願いです。おねがい」と大声で泣き出した。紀昭は妻のふところにしがみついて、これも泣き出した。

私は瞬間、呆然とした。

わが愛児は知らず、父の志をと胸中をよぎる。

私は二人の子供を両手で高高と抱き上げて二人に頬づりしながら、「お父さんは、また来るからネ、お母

さんと待っていなさいネ。お父さんのこと、お母さんのことよくきく、お利口さんだもの」と言って手放した。妻と、一緒に避難した、船津なつよ（佐賀県出身）

さんが、仁子と紀昭を引きとってくれたのを見届けて、私はほんとに後髪を引かれる思いをして、「久子万事頼んだぞ」と叫んで牡丹江駅に走り、司令部連絡所に駆けこんで群がる避難民の整理に指揮をとった。

八月十四日

私たち三千余人は牡丹江から軍関係者と見なされ、最後の列車に乗ってハルピンに向かった。これは東満国境の日本男子は皆召集令状をうけ、軍からハルピン南下を命令された。

その途中、一面波（イーメンパ）憲兵分隊長から、終戦の詔勅があったことの伝達をうけた。八月十五日である。

全員一大ショック。ひと悶着惹起したが、真実は曲げられず、悲痛な場となった。

列車の中は、発狂したように泣く、わめくの混乱、たちまち団結は乱れ、指揮系統はなおざりになってハ

ルピン駅についた。

大勢のソ連兵がまちかまえていた。

三千余人の日本人は、ソ連兵に引きずられハルピン市郊外の捕虜收容所に投げこまれた。收容所とは原野に鉄条網をはりめぐらした青天井の牧草をねぐらにするところである。

全く、豚や牛と同じ取扱いである。

床なし、青天井のこの收容所で過すこと四日間だけだった。朝、昼、晩の三回の食事は、塩の入った高粱粥を碗に一杯だけで副食なし、このまま続けば必ず全員栄養失調で倒れるだけと思った。

原野を囲んだ收容所の真ん中に高い棒を立てた先に一つの電灯を灯してあるだけの照明である。

ソ連兵は朝と夕方、必ず人員を調べる。その調べ方は、いちいち頭を数えるので手間のかかること夥しい。夜、鉄条網を破って逃亡せんとして射殺されたものも幾人かいた。つまり日本人の逃亡者調べだったらしい。

突然、全員整列。千人づつ区分して整列せよとのこ

と。私は一番先頭の千人に加わった。

整列が終わると、ハルピン郊外の收容所から徒歩でハルピン駅に到着し、無蓋車に乗せられ、逃亡を警戒されながら、延々牡丹江方面に向って発車した。ソ連兵にきくと、「ウラジオストック港から日本へ帰す」のだと言う。

われわれ日本人は無蓋車の中で小踊りして喜んだものである。

牡丹江駅に着いたら、列車は動かない。全員降車を命ぜられ、徒歩で元牡丹江日本陸軍病院に連行された。この病院が日本人捕虜收容所である。勿論、病院内には機具、備品、机、椅子、スリッパのような物まで一切ない。

窓ガラスなど一枚もない。みな盗み出された形跡で、がらんどうの建物の骨組みだけである。

この收容所の日課は、炊事仕事、掃除、体操、新材集め作業、死者運搬、埋葬、食べる、寝ると言った調子である。毛布支給するでなし、夏衣着た当時のものだけで、着替えなく、洗濯したこともなく、見れば全

く己れの姿は乞食以下の姿である。

何よりも困ったことは食事のことである。最初、高粱、粟、トモロコシ、馬鈴薯などで我慢できたが、あとでは岩石のような固い肥料用の大豆粕を割り碎いたものが配給になった。塩も副食なしで、これは水に溶かして飲食したので、たちまち胃腸をやられ死亡者まで続出した。栄養失調に罹っていたものが、こうした豆粕、しかも塩分なしの飲食であるから死亡者を出した。それに精神は平常を欠いていたので、逃亡を企てては射殺されるもの、その度に私は片手に数珠と経文を携えて葬送を執り行つた。

この収容所には興農部参事官、井上義人、協和会参事（のちの北九州市長）高橋勝治、千振開拓団長、宗光彦の諸氏がおられたので私は窃かに相談に預かつていた。

ボという、ここの収容所長に対しわれわれはハルピンの善良な市民で、軍籍に何らの関係なし、直ちに家族が待つてゐるハルピンに帰してくれといった文章をソ語に訳文して折衝したのも井上義人参事官に相談し

て実行した。

それが効果あつたのか、それとも収容所は一応観察所であつたかも知れない。そこでシベリアにおくるまでもない無価値な日本人と決まつたのかも知れない。

十一月某日、私ども個人個人全員に藁半紙で作つた無料乗車券を交付して、牡丹江駅からハルピン駅に帰したのである。

ハルピン駅構内で満州人に連れて行かれる少女（四歳）をみつけ、これは私の子供でした、と満州人らにお札をのべて、つれもどして一緒につれて歩いた。

日本敗戦のとき、ハルピンにいた日本軍の若い将校らが、ソ連司令部に抜刀し、襲撃して自ら果ててしまつた。また将校の幾人かは御真影の前に正座し自刃した。朝鮮人はソ連兵を案内して日本人家庭内に強盗に入り、金品を強奪し、日本人を殺した、等々の話題を大きく度に憤怒にたえない。

久子も仁子も紀昭も、ハルピンには探し得ない。何れかへ旅立つたらしい。

ハルピン図書館長、元伊通県文書課の刈課長とめぐ

り会ったのを機会に、ハルピン行きの幹旋を依頼して、新京（長春）駅におくってもらった。満州人の友情忘れまじ、と自問自答していた。

新京を飛びあるいて家族を探したが、皆目見当がつかない。

かつての満州国官庁には、ソ連と中国の両国旗が風にひらひらと翻っているのを見て、変転きわまりない東洋史で感じた若き日を思い出していたのが忘れられない。

長春日矯連絡事務所で菅忠行君（奈良県出身）に遭った。菅君は、ハルピンで拾った四歳の少女の頭をなでながら、私にむかって、「仁狭心に流されて共喰いになってしまわず、長春の君、このへんをうろちよろしているとしベリア行きか、射殺になるから、早く南下したまえ」と菅君の注意をうけた。

その晩は、菅君の官舎に宿泊し、暫くぶりで白飯を食った。翌日、長春（新京）駅から奉天（瀋陽）に向かつて発った。

奉天に着いた。奉天は消え、瀋陽駅と改めてあった。

敗戦以来四か月目にもなったが、日本人を生かすも殺すも、ソ連兵や八路中国兵の自由自在、悲劇は毎日いたるところで惹起したが、日本人はもう「又か」と言っつてマンネリ化していた。

新京も奉天も情況は正に様変わりしてしまった。かつての日本人の顔や姿まで全く劣等人種のようになりさがあって、満州人や朝鮮人に詔^めつっているのを見てほんとに嘆かわしく思った。

瀋陽の大都市は、スターリンと、毛沢東の壁画がいたるところに掲揚してある。私は大広場に立つて四方を眺望していたところ、丁度眼の前で親子ドンブリを売って大繁昌している商人は、なんと雜寧県協和会本部委員の近藤竹二夫婦の顔ではないか。

近藤夫婦も、私も勿論びつくり仰天、「事務長さん、よかった、よかった、心配していたのです。先生の奥さんも仁ちゃんも、紀ちゃんもみんな元気ですから安心して下さい」

「このおつれの子供（常住郁子四歳）さん、どうしたんですか」とやつぎばやの話し、私も近藤夫婦も、

互いに地獄で仏に遇つたような喜びと安心と力強さを感じた。

ドンブリ商売のあとかたづけを終わって、近藤夫婦は、家族の住む東洋綿花の社宅に案内してくれた。

近藤夫婦の神通力のお蔭で、私も家族の邂逅である。久子も仁子も紀昭も、私も四人は重なりあつて感激の坩堝くわぼと化した、近藤夫婦も号泣された。

今まで片時も私の手から離れたことのない郁子ちゃんは火のつくように泣いた。

近藤奥さんが、早速握りめしを差し上げたらけろりと泣きやんでしまった。

私も郁子ちゃんの泣き声が止んだので、みんなは泣きじゃくりから平靜化した奇遇は永遠に忘れられない労苦話である。

郁子ちゃんを明日といわず、早速、常住介三氏（牡丹江市協和会経理課長）家族の住む住宅を、久子が覚えていたので郁子ちゃんを連れて、ご両親のもとにおくりとどけた。両親はもとより弟妹みんな涙を流して喜んでくれた印象は今もまぶたに浮かぶのである。

その後、私は奉天（瀋陽）市でキリスト教界の大御所、平野一成戒教師の青山教会敷地内にある独立家屋を借りて、引き揚げまでここに居住した。教会への入りはソ連軍は敬遠したものが比較的安住のところだった。

私は生きるために、先ず満州人の馬頭と相談し協定した。馬頭は奥地の農村から米穀を奉天に運搬する。私は米穀を日本人家庭に売りつける。と云う約束である。馬頭から奥地の情報もとれるし、単純な仕事であった。

妻の久子は、仁子と紀昭を養育しながら、コロツケなどを製造する。私は朝市にコロツケを運んで卸し売りするのである。

以上のようなことをして生活を食いつなぎ一日千秋の思いで引き揚げを待った。

やがて、引き揚げの通知をうけた。妻の久子はてんでこ舞いして喜ぶこと、仁子も紀昭も母親の晴々とした顔をのぞいては、はしゃぎまわっていた。

昭和二十一年、九月三日、ナホトカを出帆し、九月

七日幾度か夢にみた祖国、宇品港に上陸し、それぞれ故郷を指して別れを惜しみながら散って行った。

ソ満国境の雞寧県で風雲急を告げて既に波乱万丈、間をおかずソ連の不法越境、満州国内に進攻され、もちろん日本敗戦の浮目にあう。

塗炭とたんの苦しみ、ソ連機から機銃掃射で死者続出、家族ばらばらに散ずる悲鳴、発狂する、伝染病、栄養失調、死者山をなす、正に生地獄とは敗戦時、満州奥地の日本人の生きざま実相である。

それをくぐり抜いてきた私は、この艱難の道を再生すべく肝に銘じた。

艱難のない人生、それは無価値の人生である。

諸々の艱難を克服して止まぬ精神、それは理想を追求する心である。

若武者、山中鹿之助は、三日月に向って、われに苦難を与え給え、と祈願したと云う。

私は引揚者の艱難苦勞した真相こそ必ずや不滅の光を放つ日の到来することを確信する。

執筆者の横顔

結城氏は僻遠農家の次男で、独学時代に時の山形県議会議長 高橋勝兵衛翁を訪ね、代議士の松岡俊三氏への紹介状をもらって上京した。十五歳の少年のこれが彼の人生出発点であろう。

中学も、大学でも推されて応援団長になり爆弾投下のような大声を張りあげていたらしい。また学生の分際で天下の名士と付き合い多く、血気にはやり、満州に新しい社会づくりの夢を抱き続けて十三年も大陸を駆けめぐり、日本の敗戦で、命から引き揚げて来れた。

三十五歳の満州引揚者、どうなるのかと案じていたが、旧満州国協和会参事の実力者、森直次氏（のちの代議士）の紹介で自由党本部事務局へ入り、朝早くから、夜おそくまで動きまわる行動が、広川弘禪幹事長の信を得たものか、吉田茂総裁の秘書になった。

昭和二十六年、チャンスを得て山形県議會議員に五期、自民党県連幹事長、村山市長に就任し、安孫子、板垣両知事の知遇と、中央政界に協力者の多いところから、順風満帆の地方政治家に甘んじた、小成に甘ん

じてしまった。

これが彼をして中央政界に進出して、日中両国の共存共栄こそ世界平和への貢献であるとの主張をしていた施策を実現せしめる機会を失った、国家的一大損失であると思う。

鬼に角、その実力を發揮する機会を失ったことは惜しみてもなお余りある。

しかし、顧みて幸せなことは、引揚者団体全国連合会の舵取り幹部は次々と他界され、たった一人、過去の長い歴史的運動に携わった結城氏が健在であることは、引揚者団体として掛け替えのない彼の存在であること。彼の行くところ、こばむ者誰があるうか、どなたにもものおじすることなく、堂々と正論を吐く強烈な雄弁は老齡をみせない。

(引揚者団体山形県連合会)

理事 渡部 一満

龍爪をあとにしての記

山形県 羽柴 芳太郎

序にかえて

昭和二十年九月中頃は、拉古^{ラゴ}收容所にいたが、收容所前の道路を隊伍正しく日本軍の兵士達が、ソ連兵士に引率されて通るのを見送ったことがあった。バラ線の柵をはさんで交わされた言葉は、「お先に日本内地に帰ります、皆さんも元気でネ、さようなら」とお互いの健康を祈りつつ手を振りながら一時の別れを惜しんだものでした。

兵隊さんだから先に帰れるのだと、ひとり納得していましたが、シベリア連行などとは誰ひとり口にする者はありませんでした。が、実のところみんなシベリア行きの兵隊さん達だったのです。

ソ満国境近くに配置された開拓団は、純然たる国境警護の任務を負わされ、食糧増産と日本軍への食糧供